

コートジボワール知って

日本の初戦の相手、コートジボワールで名古屋市西区の形成外科医、上敏明さん(64)が医療支援を続けている。手術のための訪問は2000年から計10回。「W杯が、この国の現状をより知ってもらおうきっかけになれば」と期待する。

日本代表、15日初戦で対戦



コートジボワールで手術をする上敏明さん(右) 上さん提供

名古屋の形成外科医 口唇裂手術や医療支援奔走

10回目の訪問は今年3月。

主要都市、アビジャン郊外の病院で、唇が裂ける先天性の病気「口唇裂」の患者30人を手術した。手術には大学病院の医師らも研修に来た。「医師の技術も、手術道具も足りない」と話す。

現地で活動する知人のキリスト教宣教師から「口唇裂の患者が手術を受けられず、困っている」と相談を受けたのがきっかけだ。長く内戦に苦しんだコートジボワール。00年11月に最初に訪れた時は「拳銃を持った軍人が検問を

して、トランクを開けられて厳しくチェックを受けた」と振り返る。道は穴が開き、ごみや汚水の臭いでマスクなしでは歩けないような衛生状態だった。

都市部のインフラは整備されてきたが、一歩郊外に出れば、今も自給自足の生活が続く。日本では乳児の時に無料で受けられる口唇裂の手術も、一部の富裕層しか受けられず、大人の患者もいる。2年前に手術したミヤタブ・マボさん(23)もその一人。「先生のおかげで結婚できました」と報告に来てくれました」と喜ぶ。

これまで手術した患者は約300人。メス、はさみ、ピンセットなどの手術道具の援助も手弁当で続ける。いつでも手術ができるよう、現地に医院を開くことを目指している。

(村山遼太)